

集まる地震、離れるコロナ

新年を迎えるたびに思い出すのが、1995年1月17日午前5時46分に発生したM7.3の阪神淡路大震災です。

あれから丸28年が経過し、神戸の街中にその傷跡はなく、年末の恒例行事となった鎮魂のための神戸ルミナリエで当時を振り返るくらいとなっていました。激震地であった神戸の中心にある東遊園地には地震で亡くなった方々の名前がモニュメントに刻まれています。

阪神淡路大震災では神戸市全域が甚大な被害を受け、当院も関連施設を含めて約5億円の損害を出しました。

地震をきっかけにしてリスクマネジメントを学習し身につけたつもりでしたが、今回のコロナパンデミックでは全く勝手が異なり、その対応に今も苦慮し続けているのが現状です。

地震をボクシングに例えるなら、一発KOの強烈なパンチを浴び、カウント8で立ち上がり、クリンチやダッキングを繰り返しながら何とかしのぎ切ったようなもので、敵は明確で、誰もが皆こちらに大声援を送ってくれました。

一方コロナは強烈なパンチだけではなく、ボディーブローのように繰り返しレバーに小さなパンチを喰ら続け、徐々に体力が消耗してくる感じです。

おまけに感染者は犯罪者扱いされ、いくら「敵はコロナだ!」といっても、「感染するアンタが悪い」といった有様でした。

今や感染者総数は3100万人を超え、国民の4人に1人が感染した現在ではそこまでの偏見はなくなりましたが、地方都市では感染者はまだ肩身の狭い思いをしているようです。

人は見えないものに対しては強い恐怖を感じます。リスクを例にとると、一般市民は(恐怖感×未知性)でリスクの強弱を感じ、専門家は(リスクの強さ×頻度)でそのリスクを評価します。

地震の強度は震度で判断でき、揺れは皆が感じることができました。コロナは専門家にとっても未知のものである上に、検査をしないと感染の有無も分からないので、誰もが疑心暗鬼になったのです。さらに、マスコミ報道やSNSで恐怖が増幅され国民全体がパニックに陥ってしまいました。

地震のときは被害者が皆で肩を寄せて助け合いましたが、コロナでは3年前に当院でわずか1人の感染者が出ただけで潮が引くように誰も寄り付かなくなってしまったのです。

まさに「集まる地震、離れるコロナ」であったと、今思い返しています。



病院がある若宮商店街、多くの家屋が倒壊



地震直後の旧病院

◆今週の院長予定

1月16日	月	8:00法人会議、12:00来客、13:30松江校看護国試対策講義、17:30医局会、18:00治験委員会			
1月17日	火	9:00外来、14:00手術			
1月18日	水	松江 看護学科国試対策講義、運営会議			
1月19日	木	9:00~11:00来客、17:30永年勤続表彰式			
1月20日	金	9:00外来、14:00手術			
1月21日	土	9:45新須磨クリニック健診業務、14:00介護の家訪問診療			
1月22日	日	18:00やまぶき財団総会			